

# 岐阜県農業技術センターニュース No.15

## シクラメン病原細菌のPCR法による迅速検出技術を開発しました 生物機能研究部

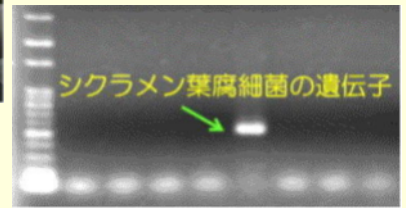
シクラメン葉腐細菌病は、病徴が進行すると他の細菌病や糸状菌病と見分けがつかなくなり、適切な防除が出来なくなります。

そこで、病徴が酷似する3種の病原細菌(シクラメン葉腐細菌、芽腐細菌、軟腐病菌)を迅速かつ的確に診断できる遺伝子診断技術を開発しました。

今後、萎凋病に対する診断技術や、一度に複数の病原を診断できるマルチプレックスPCR法を開発するなど、より広い病原種の診断に対応できる体制を整えたいと考えています。



シクラメン葉腐細菌病の症状



シクラメン葉腐細菌の遺伝子

## バラ栽培における夏期高温対策に取り組んでいます 花き部

近年の夏期の異常な高温は施設園芸における周年安定生産を妨げています。バラにおいても、夏期は地温の上昇により根の活性が下がり、樹勢の低下を招いています。この対策として、冷房のランニングコストが安い改良型高圧細霧冷房(ドライミスト)と根圏冷却栽培システムに着目しました。

ドライミストは、非常に細かく揃った水滴を発生させることができる装置で、細かい水滴のため蒸発が早く、瞬時に熱を奪うことができ、降温効率が極めて良好です。また、根圏冷却ベンチは、不織布に

より培地を覆い、気化熱を利用して根圏を冷却する栽培ベンチです。

バラ栽培に最適な根圏冷却ベンチを開発すると共にドライミストとの組合せ効果を検討しています。



バラ温室における  
ドライミスト設置

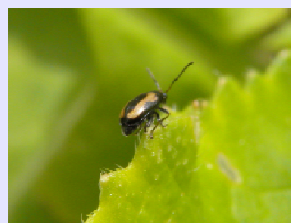
## キスジノミハムシの防除対策に取り組んでいます 環境部

郡上市高鷲町のひるがの高原で生産される夏ダイコンでは、近年キスジノミハムシ(以下キスジ)の発生に悩まされています。

そこで、キスジの被害を減らすため、郡上農林事務所農業普及課と協力し、現地で各種調査を実施しています。また、農技センター内では、キスジに効果的な防除体系を構築するため、各種防除試験を実施しています。

5月には現地研修会で昨年度の試験結果の紹介、生産者の意見をお聞きしました。今年度

も現場で活用できる技術確立を目指して取り組んでいきます。



キスジノミハムシ(成虫)

発生消長調査  
(誘引トラップ)



生産量が少ない地域特産物(マイナー作物)の生産を安定させるため、農業普及課や現地生産者の方々と協力して農薬登録のための試験(薬効、薬害、作物残留)を行っています。

これまでにに行った18件の試験のうち16剤が登録となり、栽培暦にも取り入れ活用されています。

本年度は甘長とうがらしの苗立枯病を対象に、オーソサイド水和剤の登録に取り組んでいます。

これまでの取り組みで、登録になった農薬の一例です

年度	作物名	対象 病 害虫	登録農薬
H15年	未成熟ささげ	アブラムシ類	アドマイヤー1粒剤
H16年	やまごぼう	ネキリムシ類	ダイアジノン粒剤5
H17年	くり	実炭疽病	ベルコートフロアブル
H18年	ミズナ	キジノハムシ	ホスピット乳剤
H19年	えごま	ネキリムシ類	ネキリトンK
H20年	チコリ	一年生雑草	ナブ乳剤

## 普及が進む、トマト独立ポット耕

## 野菜・果樹部

当センターで研究開発を進めてきたトマトの独立ポット耕は、これまでに県内5戸(120a)の他、県外へも普及され、今回初めて、県内冬春トマトの主要産地である海津地域へ導入されました。また、揖斐川工業(株)と共同で開発を進めているハンギングガター方式による独立ポット耕システムが採用されました。この方式は施工が非常に短時間でできるという特長をもっています。海津地域ではまだ1戸(10a)のみの導入ですが、5月末に独立ポット耕研究会を開催したところ、1年

で最も忙しい時期の開催にもかかわらず、多くの生産者が参加され、関心の高さが伺われました。今後の普及が期待されます。



↑ ハンギングガター方式独立ポット耕システムへの定植作業

↓ 研究会のようす



## 簡易農薬分析システムで「日本農薬学会・業績賞」を受賞!

「農業生産現場における簡易農薬残留分析システムの応用と普及」に対して、当センター天野昭子専門研究員に平成22年度日本農薬学会・業績賞(技術)が贈られました。受賞式は5月28日に札幌市教育文化会館で開催され、受賞内容についての講演も行いました。

